

本書は、摂食障害をキーワードとして、私たちがつなぐた人たちと共に綴ってきた「つながり」本です。

共著者、渡邊直樹は「食行動異常研究会 party II」という家族会(当事者・親・兄弟姉妹の会)を主催しています。私、野村佳絵子は「かなりあしょつぶ」という当事者の会(自助グループ)を主催しています。2人は、摂食障害の当事者、家族、専門家と多くの時間を共にしてきました。しかし、「食行動異常研究会 party II」と、「かなりあしょつぶ」は、まったく別のグループです。そんな2人が、あるとき、つながることができました。

また、渡邊は精神医学を専門としており、野村は社会学を専門としています。摂食障害を語る(知る・診る)には、医学と社会学、双方の知識や視点が必要であることは、今さら強調することでもありません。ところが、これまで私たちが知る限り、日本では、医者が書いた摂食障害にかんする本、社会学者が書いた摂食障害にかんする本、といったふうに、かなり棲み分けがなされています。少し乱暴ない方になりますが、医者は社会学者の書いたものを読まず、社会学者は医者の書いたものを批判する、だけになっているともいえます。私たちは、立場が違うからこそ、つながってみました。

そして、ちょっと立ち止まって考えました。「あなたは当事者だからわかる」とか「あなたは家族じゃないからわからない」みたいになっていませんか、と。当事者の会(自助グループ)や家族の会は、「同じ経験をした人が安心して集える場所」「仲間同士が支え合うグループ」です。ただ、「経験者だけ」「仲間だけ」が強調されすぎると、そうでない人たちを排除することにつながります。家族は一番小さな社会、当事者の会や家族の会もまた、少し小さな社会です。つきには、もう少し大きな社会があります。私たちは、当事者の会や家族の会が、つきへとつながる緩衝材になればよいなと考えています。「食行動異常研究会 party II」も「かなりあしょつぶ」も、オープンに参加者を受け入れています。

本書の骨子は3点です。

- ① 私(の家族)から私たち(の家族)へ
- ② プロセスとしての(家族)物語の構築
- ③ 他者とのつながり、自然・社会とのつながり

これらを伝えるために、当事者・家族からの一方通行的な訴えでなく、当事者・家族・専門家がそれぞれの立場から意見し、違いがあっても当然という前提のもと、対話しながら綴っていきます。文と文とのつながりはもちろんですが、本書を通じて、人と人とのつながりがあっていける作品になるとよいな、と考えています。まだお会いしていないあなたとつながることができたら。個人や家族に還元することなくよりソーシャルなつながりをもたらすことができたら。

渡邊は、「ちょうどミヒヤエル・エンデの物語みたいな」という想いがあります。野村は、「世代から世代へと語り継いでいけるとよいな」と願っています。

著者を代表して

野村 佳絵子